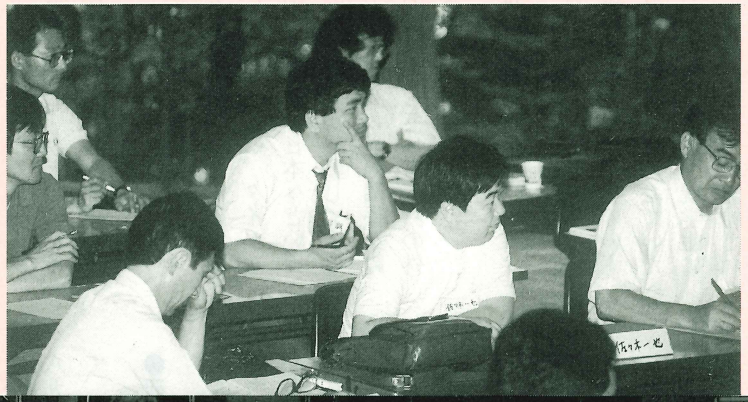
SEMINAR HOUSE NEWS

セミナー・ハウス'92秋

＝巻頭言＝
外国人労働者急増の要因を探る●江橋　崇／2

■大学共同セミナー
となりの異邦人／4　数と論理のファンタジア／7
■大学教員研修プログラム
若手教員に期待するもの／9
■法人ニュース／11
共同セミナー委員会・大学教員懇談会企画委員会
国際プログラム委員会・ＦＤプログラム小委員会
■千人会・寄付金報告／12
■業務通信／13
■利用状況／15



Plain living and high thinking

No.128

外国人労働者急増の要因を探る

――適正な処遇確立のために――

法政大学法学部教授　江橋　崇

まず、日本で外国人労働者問題が発生してきた背景について確認しておく必要がある。一九八〇年代に特に加速された運輸・交通革命と通信・情報革命の二つの流れの中で、現在では、主としてアジア・アフリカ諸国の人口増加と、国外へ向けての大規模な人口移動が存在する構造になっている。それを踏まえて、世界市場の成立という国際的な問題と共に、国内で貨幣経済が浸透し、人々が動かされはじめたことを背景として考える必要がある。

第二に、都市への人口集中を緩和するために、いくつかの国が労働力輸出政策をとったことも忘れてはならない。さらに、タイから台湾、台湾から韓国、韓国から日本へというようにドミノ倒し的に労働者が移動している状況がある。そのような相互の連鎖関係を踏まえ、世界的問題の一部として日本国内の外国人労働者問題があることを指摘したい。

●在留資格の改定がきっかけ

ところで日本では、一九八〇年代に数多くの外国人労働者問題が表面化した。そのいずれもが在留資格の改定をきっかけとしていたことが特徴的だった。まず留学生・就学生については、一九八二年に就学ビザが発給されるまでは、国外で日本語を勉強し、日本の大学などの教育機関で耐えられる水準に達してから来日しなければならなかった。ところが、まず日本に来て、日本語を勉強し、大学に受かる力がついたら受験する、という就学生から留学生への道が開かれた。これに八三年の「留学生10万人計画」も影響を与えた。そして八四年に就学ビザの手続きを簡素化し、日本語学校を経由する申請も承認された。また、八三年に留学生のアルバイトが解禁され、八四年には就学生にもそれが及ぶことになった。これは、生活苦の留学生にとっては良いことで、新聞等でも大いに歓迎された。しかし、一年経つと就学生・留学生と称する労働者が来日するようになってきた。この状況は、八九年に中国人就学生急増問題が表面化して、日本語学校が規制されるまで続いた。

●研修名目の労働者が急増

第二に、八二年に改正された入国管理令を取り上げたい。この法律では、公私の機関が産業上の技術または技能の習得を目的とした技術研修生の受け入れ枠を設けた。しかし、入国審査の緩さから、八六年頃から研修生名目の労働者が急増し始め、八七年には特にタイからの研修生が問題になった。そして、八九年頃から、南米日系研修生が急増するようになった。

第三に、オーバーステイのアジア人労働者の問題が挙げられる。八五年頃からジャパゆきさんといわれた水商売・性風俗産業で働かされている女性たちが、問題となった。ところが八六、七年頃から男女比率が逆転し始めた。当時不法就労とか不法残留として摘発された人々の統計の中ですら男性の割合が増えてきた。主に東南アジア諸国から、いわゆる3K労働で働く男の人たちが目立ってきた。

●反不法就労キャンペーン

そういう中で八九年に「西ドイツの失敗を繰り返すなキャンペーン」があった。西ドイツの保守的な考えの人々が行なっていた反外国人キャンペーンに乗り、情報ソースが片寄った形で、煽情的なキャンペーンが日本でも行なわれた。これをもとに、日本はアジア諸国と結んでいたビザ免除協定を見直し、反不法就労キャンペーンを張る一方で、南米日系人を受け入れる方針に切り替えた。彼らは、最初の頃はブローカーによってだまされて連れてこられたケースが主だったが、九〇年に入国資格が緩くなり、また現地における募集が活発になったため、入国を激増させた。

●入管法改正の失敗

我々は日本で働いている外国人の人権をなんとかしなければ大変なことになると言ってきたが、政府は「入国統計を見なさい。入国した外国人労働者はいないのだから余計な指摘をしないで下さい」と言い続けた。しかし、諸問題への対応のために政府内部でも検討が開始された。九〇年六月の、いわゆる「九〇年入管法改正」の施行により、第一に不法就労助長罪、第二に研修生の規制、第三に南米日系人の導入の制度化が決定された。ところが、これらは全て失敗に終わった。

まず不法就労助長罪についてであるが、日本の企業は助長罪があるからといって外国人の雇用をやめたわけではなく、むしろ雇用を活発化させた。また、労働力不足を研修生という形で補塡しようという、巨大なプレッシャーがある中で、研修生規制も野放しになっていった。その結果、研修生名目で働かせるというケースが山ほど出てきた。また、最初

えばし　たかし
法政大学法学部教授。昭和17年６月21日、
東京生まれ。昭和41年東京大学法学部卒。
憲法専攻。主著『外国人労働者と人権』
『象徴天皇制の構造』

はまじめに研修生のつもりで受け入れているのだけれど、ずるずると不法状態になってしまうというケースもあった。さらに、日本政府が力を入れていた日系人の導入も失敗してしまった。政府は自動車産業の労働者不足改善のため、大幅に日系人が下請けに入ることを認めた。そのために改正された入管法では、日系人の定住枠を設け、子供の定住も認められた。ところが一年後の実態調査では、日系人の八割が正式な雇用契約なしに働いていた。日系人はアルバイト感覚で働いており、おまけに被害者意識すら持っていない有り様だった。従って、この方法も結果的には資格外就労ということになってしまった。

●国境を閉ざすことはできない

我々は、不法残留状態の外国人を摘発し、国外に退去させる入管当局の能力を高く評価していた。ところが、実は日本国政府はそういうパワーを持っていないようである。これだけ外国人の数が増えて来ると、対策にも限りがあるのではないか。例えば市場原理、あるいは景気などによって外国人の出入りは左右されるが、政策的に国境を閉ざすことはできない。もう外国人は容易に日本から出ていかないだろう。そうした場合日本国政府は当てにならないということになる。その時、我我の考え得る日本社会のイメージは二つに分かれるのではないか。一つは来日する外国人を差別し、時には排撃する社会であり、もう一つは外国人への激しい人権侵害をなくして、共に日本の社会を作っていく人間として対応していく社会である。現在、我々はいずれかを選択する節目に立っているのではないか。

●外国人採用コストは産業界全体で

日本において問題となるのは、企業の責任がはっきりしないことである。日本に外国人労働者がこれだけ増えてしまったのは、呼び寄せて働かせている企業があるからである。ところが日本の企業は外国人採用コストを考えていない。それどころか、諸問題への対応はほとんどが自治体中心となり、自治体も対応できないときは、ＮＧＯが独力で奔走する有り様である。個々の企業では無理としても、産業界全体が責任を負うべきである。

次に、民間団体の対応も考慮しなければならないだろう。まず労働組合についてだが、これまでは労働組合は外国人労働者問題をあまり深く意識していない傾向があった。その理由としては、外国人労働者が入ってくることにより、自分たちの職場が奪われるのではないかという気持もあったようである。しかし、昨年からは、現在日本で働いている外国人の労働者としての権利は守らなければいけないという方向性が少しずつ出てきているようである。

もう一つは人権ＮＧＯである。外国人労働者問題に関しては、本当に献身的な一部の人権ＮＧＯによって、日本社会での差別問題などがかなり救われてきたようである。現場の実情をつかんでいる彼らが、今後行政・産業界・マスコミなどに、これまで以上に問題を提起していくのではないか。

●南北問題としての外国人労働者問題

さて、日本政府もどうやら政策を転換しつつあるようである。最近では、行革審などでも労働力の受け入れを前提としたいろいろな政策が提起されるようになってきている。まず日本国政府の入国管理能力が限界に達していることを公然とさせた方が、非常に問題をはっきりとさせていくのではないか。そして次に、外国人労働者と一諸に住んでいく中で、相互の人権をどう認め合っていくのかということを考える必要があるだろう。

そのためには、外国人がきちんと処遇されるための「人権インフラストラクチャー」が必要なのではないか。日本社会にあるさまざまなシステム、特に医療・教育・福祉などに外国人が参加し、あるいは利用できるものとして再編成することであり、もう一つは、日本人の方も意識を変化させていく必要があるだろう。

八〇年代から起きている現象は、地球規模での人口及び労働力の移動の一環である。なぜこんなことが起こるのかと言えば、南北問題が未解決のままに放置されていることに原因があることは言うまでもない。この問題をそのまま放置しておくと、日本国内だけで外国人処遇の問題を考えてみても、徒労に終わってしまう危険性があるだろう。やはり、南北問題を考えないことには、外国人労働者問題も根本的には解決しないのではないだろうか。

（文責・編集者）

となりの異邦人

――外国人労働者問題を考える――

一年間の入国者が三八〇万人を超え、私たちのすぐ隣に外国人がいる時代になった。日本が長年採用してきた労働鎖国政策はすでに転換され、外国人労働者が受け入れられつつある。今年は技術研修生の研修後の就労も認められるようになる。外国人労働者はますます増加し、社会に定着するものも増えるだろう。マスコミは連日のように外国人労働者とその家族の生活上のトラブルを伝えている。日本社会にかつてない経験だが、病院、学校、地域、職場など現場では、外国人を扱うノウハウも物的な条件も不足していて、混乱は大きい。それに輪をかけるのが言葉の不通が生み出すトラブルである。日本社会はこの人々をどう受け入れようとしているのか。社会の側はどう変わろうとしているのか。

◆

日本社会ではすでに数十万人の外国人労働者が働いている。いないはずの単純労働者がなぜこれほど多くいるのか。セミナーの冒頭、国際的な人権問題に詳しい**江橋崇**・法政大学教授がこの数年間の主要な動きを紹介しながら、この問題を考える素材を提供された（2～3頁参照）。また続く共通セッションでは、**間宮陽介**・神奈川大学教授を司会に、A～Dのセクション演習を担当する各講師からそれぞれのアプローチが提示された。

まずAセクションの「**異文化接触と共生―外国人労働者との出会い―**」を担当する**駒井洋**・筑波大学教授は、実証研究を踏まえながら、外国人労働者の流入は日本と第三世界の不均等発展の状況のもとでは必然的であるという事実を前提に、単純に開国すればよいということではなく、入国制限をしながら、すでに日本にいる外国人に対しては、日本人と同様の権利を保証すべきであると、鎖国論にも開国論にも与みしない「必然論」の視点を提示された。また、外国人労働者相談を通じて、共に働き共に生きる地域社会作りを実践している**小畑精武**・労働組合江戸川ユニオン書記長は、「地球は一つであり、国家は一つの地方にすぎない」と、国家の枠にとらわれず地球的視野で考えることの重要性を強調された。

Bセクションの「**社会文化生活の中での日本人と外国人の平等とは？**」を担当する**宮島喬**・お茶の水女子大学教授は、「外国人も一住民なのだから教育、医療、社会保障などのサービスを平等に受けられるはずなのに、なぜ外国人はそれが困難なのか」と、特に地方自治体での平等の問題について指摘。

Cセクションの「**外国人労働者の経済的インパクト**」を担当する**樋口美雄**・慶応義塾大学教授は、「外国人労働者の受け入れは受け入れ国・送り出し国の両国に大きな経済的影響をもたらす。送り出し国では海外で働く労働者からの仕送り金による外貨獲得によって経済成長が促進されると通常考えられている。また受け入れ国では労働力の増加により生産能力が拡大し、物価上昇を押さえられると考えられているが、これらは本当だろうか」と計量経済学の立場から、両国の便益と費用について再検討すべきだと問題提起された。

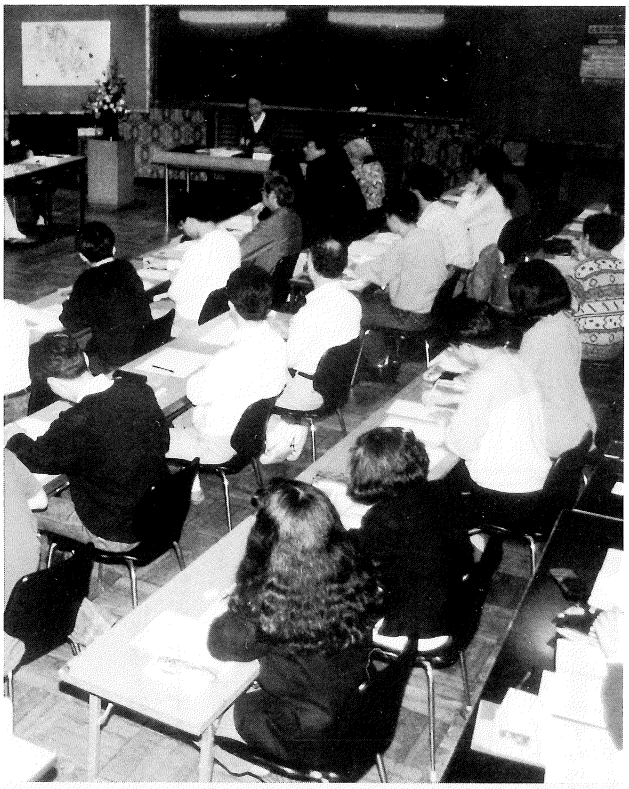
外国人住民の急増は、日本政府が明治時代から維持してきた警察的な外国人管理システムを崩壊させつつある。地域・自治体レベルでは、草の根の差別と迫害の日常化か、それとも権利の保証を基礎にした共住社会の構築かの選択が問われている。最後に、Dセクションの「**住民としての外国人の権利法―政治・行政の対応―**」を江橋氏と共に担当する神奈川県国際交流協会の**阿久澤麻理子**氏は、先進的な施策を実施し、外国人との交流に携わっている立場から「ごく普通に隣にいる人の問題として考えてみたい」と発言された。

セミナーでは、これらの講師の問題提起を踏まえながら、四つの分科会に分かれてさらに議論を深めた。

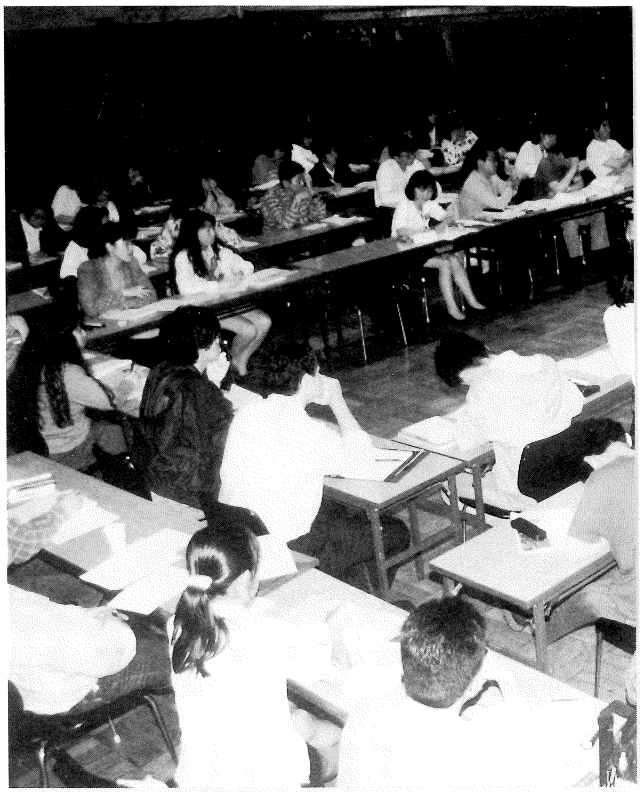
◆

国籍がどこであろうと3年以上居住していれば、地方議会選挙での選挙権・被選挙権及び国民投票への参加権が与えられている国があると聞いても、私たちはすぐには信用しないだろう。絶望的なくらい対応が遅れている私たちにとって目からうろこが落ちるほど対照的な国際国家・スウェーデンの対応について、スウェーデン政府発行のIDカードを持つ**岡澤憲芙**・早稲田大学教授が、二日目午後に「**《地球市民権》の試み―国際国家・スウェーデンの実験と苦悩―**」と題し、ゲスト講演を行なった。

スウェーデンでは在住の外国人に対してスウェーデン国民と同じ生活水準を保証しなければならないという基本原則がある。在住外国人を母国に送り戻そうとしたことはほとんどない。むしろ外国人を暖かく受け入れ、スウェーデン



ぐ隣に外国人がいる時代になった。マスコミはのトラブルを伝えている。日本社会はこの人々はどう変わろうとしているのか。



1年間の入国者が380万人を超え、私たちの隣日のように外国人労働者とその家族の生活上をどう受け入れようとしているのか。社会の側

びいきにして帰国させるといわれている。例えば、住宅・教育・福祉政策における同一の権利、同一労働同一賃金、地方議会の選挙権被選挙権、地方公務員就職権、母国語学習機会の提供、民族差別オンブズマン制度などいかに外国人が手厚い制度的な保証を与えられているかが紹介された。もちろんこうした寛大すぎる外国人政策に対して、最近では地方住民から反対の意見も出されているという。

とはいうものの市民が自分たちの税金でここまで差別のない外国人サービスをしている姿を見ると、経済大国になったといわれる日本の諸施策の遅れがいっそう際立たされる。最も違う点は、「国籍よりも現に生活基盤をスウェーデン社会にもっているという事実の方が先行するのだという地球市民としての発想があることだ。しかもそうした発想のためには代価も払うべきだという極めて合理的な考え方があることだ」といえよう。

それに引き換え日本では、「外国人労働者を含む在住外国人に対する政策が代価論として展開されず、情緒論に流れがちである。そのことがかえって問題解決を困難にしている。ようやく今年になって在日外国人の参政権を求める政党が出てきたが、日本の外国人問題の一つの突破口になるのではないだろうか」と〝小さな国際国家〟といわれているスウェーデンの先進的な試みが紹介された。政治的、経済的、文化的な違いが大きい日本にとっても多くの学ぶべき点がありそうだ。

◆

ゲスト講演を受けて、**小西正捷**・立教大学教授（南アジア文化史）を司会にシンポジウム「**ボーダーレス社会における外国人労働者問題―今来人（いまきびと）との共生の道を求めて―**」が開かれた。

スウェーデンの制度的な整備にはすばらしいものがあるが、日本ではこれからどのような受け入れ体制を整備していけばよいのか。外国人労働者を受け入れるということは、単に労働力を調達するということではなく、生身の人間が生活するということなのであり、それに伴って社会制度的にも、日常生活においても大きな変化がある。受け入れ体制の整備に伴うコストを誰が、どれだけ負担するか。また行政によるコスト負担に対する市民のコンセンサスをどうするか。企業の適正なる負担はどうあるべきか。スウェーデンでも福祉国家理念を制度化し過ぎたのではないかとの反省が一部にある。「日本でも社会制度化すべき部分と企業負担可能な部分を見極める必要があるだろう。そのためにはまず公的機関による外国人労働者に関する正確な実態調査」（江橋氏）が必要だろう。

企業や政府の対応と同時に、今来人としての外国人と職場や生活を共にしている私たち一人ひとりが地域と生活のレベルで何ができるのか。まずは「地域で直接的に交流することを通じて、より身近な問題として認識すべきであろう」（小畑氏）。また「日本での議論には労働者を送り出す国の論理、帰国者がどうなっているのかの視点がほとんどないが、送り出し国にも眼差しを向けるべきである」（駒井氏）。たとえ全面的な受け入れでなくても「在住者に対してはヒューマンな対応をする必要がある」（宮島氏）などの意見が出された。

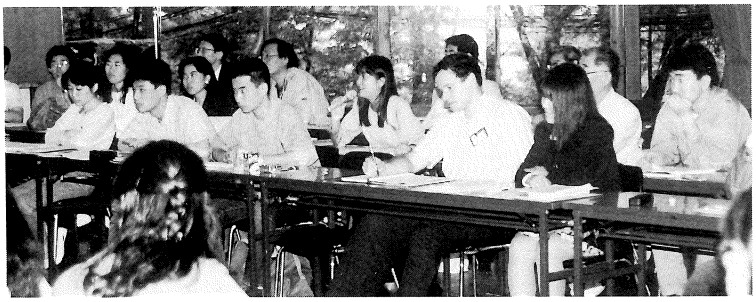
◆

最終日の全体集会では、次の通り各セクションから演習の報告があった。

●私たちにとって外国旅行で体験するにすぎなかった異文化との接触が、今日では日常的に起こっているし、一部地域では多文化状況さえ生まれている。こうした中で、私たちは同じ地域で生活している異なる文化を持つ人々とどのようにつきあっていけばよいのか。限りなく単一民族に近い形で生活してきた長年の経験から、外国人に対する差別意識や異文化に対する偏見が制度化され、私たちの常識にまで広がっている。「異文化に対する無知から生じる偏見を克服するためには、異なる文化を尊重し、それぞれの民族言語による民族教育を保証すべきではないか。同時に、日本政府は今なお批准しようとしていないが、国連の人権擁護のための人種差別撤廃条約を批准すべきではないか。せめてそうしなければ、人種差別はもちろん、雇用差別、就職差別、住宅差別もなくすことは困難である」とAセクションからの報告があった。

●日本で外国人が平等に処遇されるためには、これまでは日本国籍をとって、日本語を話し、日本の習慣に従い、社会に同化しなければならなかった。社会保障の権利においてはかなり改善されてきたが、まだまだ問題は多い。医療と教育では地域住民である限り平等なサービスを受ける権利がある。「法や制度の上で外国人と日本人の平等が定められていながら、外国人であるがゆえに結果として制度の利益を得られない。地域社会で外国人を平等に受け入れるためには、確かに行政コストはかかる

（6頁につづく）



留学生を交えての白熱した討論――講堂にて

前から3列目の左から、阿久澤、間宮、宮島、岡（館長）**、江橋、岡澤、樋口、駒井、小畑、小西の各氏**——シンポジウムの合間に記念撮影（講堂にて）

が、機会の平等だけではなく、結果の平等に対する配慮が是非とも必要である。法や制度の中で差別をなくすことは結果の平等に必ずしも自動的にはつながらない。例えば日本語の不自由な外国人は、満足な手続きもできず、泣き寝入りすることにもなる。これからは〝相違の権利〟を認めつつ、いかに社会的統合をはかっていくかを考えるべきである」とBセクションから報告があった。

●一九七〇年代以降の日本経済の相対的浮上と円高の過程の中で急激な労働力移動が生じている。外国人労働者の供給圧力となっている発展途上国の余剰労働力を、出稼ぎに頼らず現地で吸収するために、いかに雇用機会を創出するかが、世界経済に依存している日本にとっても無視することのできない問題となっている。外国人労働者の経済的インパクトについて議論したCセクションからは「故国を捨てて海外に働きに出るよりは、国内に働き場があることが望ましい。第三世界の絶対的貧困を救うために、日本は援助、投資、技術供与などの面で協力を惜しまず、特に教育のインフラストラクチャーへの投資をする必要がある」との報告があった。

●外国人労働者の受け入れでまず問題となるのが、教育と住居であろう。「来るか来ないか」の問題ではなく、「来ている者をどうするのか」というせっぱ詰まった問題を地方自治体では抱えている。「行政だけでなく地域住民のコンセンサスをどう作るか、そして肌の触れ合える距離で接することによって偏見を少しでも解消していく。他人ごととしてではなく、自分たちの問題として考えていくことが重要だ」とDセクションからの報告があった。

分科会での報告を踏まえた、最後の全体討論では、いくつかの問題や課題が参加者から出された。まず受け入れ国の問題として、労働者不足（特に不熟練労働者）を安易に外国人労働者の受け入れによって乗り切ることは、低賃金労働や経済の二重構造を温存させ、新技術の導入を遅らせることになるのではないか。一方、送り出し国の問題としては、経済的な困難を海外からの外貨送金で解決しようとする政策は、短期的に積極的な効果をもたらすと考えられてきたが、逆に先進国への経済的依存を深めるばかりであり、国際収支の構造的改善につながらないのではないか。

合法非合法を問わず、すでに日本で暮らしている外国人とどのような共生のあり方があり得るのか。私たちが今まさに直面している問題だけに、十人十色の反応があった。「既成概念がくずれてもいっこうにかまわない。個別具体的な事象から経験主義的に、現場を見据え、現実の中から考えていくことが大切だ」と江橋氏は、最後に総括された。

日本語がしゃべれない、肌の色が違う、宗教も異なる異邦人とどのようにつきあっていけばよいのか。単なる入国管理法問題としてではなく、身近な問題として真剣に考えていかなければならなくなったことを実感させられたセミナーであった。

差別感情の克服が課題

立教大学社会学部3年　鈴木　宏枝

大学生活も三年目を迎え、果たしてあと一年間自分は何を学び、何を将来へつなげていけばよいかわからず混沌としていた私にとって、今回のセミナーは大変有意義なものでした。

外国人労働者問題そのものというより、民族・人種差別・移民政策に興味があり、CIS独立や今もなお内戦状態が続くユーゴスラビアの情勢を見て、人種の共存・社会的統合をするために私達は何をすべきか、真剣にかつ迅速に対応しなければならないと常々考えてきました。

単なる机上の空論ではなく、学生そして人間として、外国人（この〝外国人〟という言葉を〝NON-JAPANESE〟と言い直すようになった参加者の意識変化も今回のセミナーで得たものの一つです）にどう接していけばよいのか。これが我々が行き着いた最終的な問いだったと思います。

Cセクションでは外国人労働者を経済的人員不足を補充するものとしてアプローチがなされていましたが、そのような中で作られる労働の構造の二重性が、差別感情を生み出す主な原因と考えられます。

しかしながら、どの地域においても差別問題を克服することは非常に難しいように思われます。国内が平和であり、経済的に安定している間は表面化しなくても、ひとたび経済不況が訪れ、日々の生活をも維持していくのさえ危ういという状況下では、とたんに差別感情がむき出しになり、二重構造の下部、いわゆる単純労働に従事する異民族・異人種がまず最初に解雇されていくのが現状です。このようなことからみても、留学生を含めた今回の意見の交換は、実りあるものだったのではないでしょうか。

数と論理のファンタジア

現代社会における種々の事象は、実は数と論理を抜きにしては語ることができない。だが、それにもかかわらず、私たちは数学や論理というものを敬遠しがちである。このセミナーでは、最先端の数学研究者をお迎えし、数学が専ら嫌われ、誤解され続けているのはなぜか、加えて数学の魅力とは一体何かを語り合った。

参加者は数学を専攻している理系の学生を中心に総勢57名（東京・津田塾・横浜国立・慶応義塾・お茶の水女子・日本・東京理科・群馬・早稲田・中央・東京工業・筑波・茨城・明治・法政・立教・国際基督教・上智・東京経済・聖心女子・東海・東京薬科・東洋・桜美林、以上24校）。その内、理科系は37名で、数学嫌いが多いといわれる人文社会系からの参加は17名にとどまった。

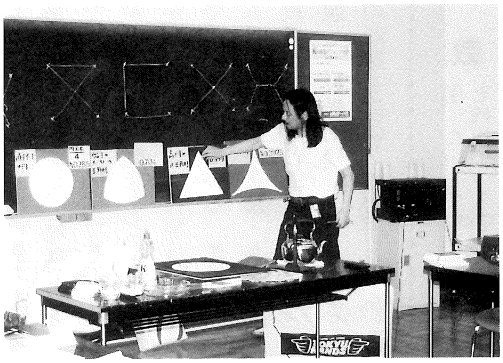
左より何森、野崎、秋山、岡（館長）、**藤原、波多野の各氏**——ようこそ広場にて

◆

人間が生み出した文化の中で、数学は随分変わった性格を持っている。これだけ役に立っていながら役に立っていないと思われているのも珍しい。〝こわい、わからない〟という声の中には随分誤解も含まれている。なぜ数学は嫌われるのか——。数学の面白さを著わした数々の著書で知られ、また今回のセミナーのコーディネーターでもある**野崎昭弘**・国際基督教大学教授は、基調講演「**数と論理と人間と**」の中でその原因について指摘。「一つは試験の影響。数学だけが知能の尺度ではないにもかかわらず、常に選別の手段として利用されてきたからだ。二つ目は、初等・中等教育の段階で、教える内容が多すぎてそれを消化するのに忙しく、根本的なところにゆっくり時間がかけられないこと。三つ目は、教師の教育技術の問題。数学教師はたいてい数学ができる人だから、なぜ子供たちが数学を嫌うのか、またできないかがわからない。子供たちは論理でつまずいていると考えてしまうが、心情でつまずいている場合が多い。子供たちがどういうところで心理的に引っかかっているのかをうまく見つけることが教師の腕である」と講演された。

数学が好きとか嫌いとかいう前に、そもそも人間と数とはいかなる関係にあるのか。基調講演に続くシンポジウムⅠでは、まず**波多野誼余夫**・独協大学教授が、「人間の心と数」の切っても切れない密接な関係について、乳児の数知覚、計数原理の理解、日常の算数などの事例をあげ、人間がいかに量化する動物であるか、認知科学の立場から試論を展開された。

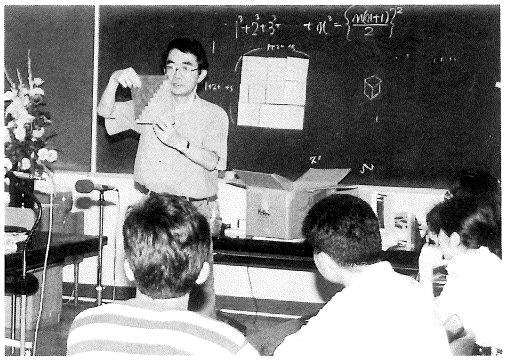
次にシンポジウムⅡでは、数学オリンピックやユニークなキャラクターでファンの多い**秋山仁**・東京理科大学教授が「**知性の織りなす美**—マセマティカル・ファンタジー—」と題する講演の中で、〝コイン詰め〟や〝掛谷問題〟などを問いながら、シャボン玉やえんぴつなど身近なものを巧みに使いつつ、いかに日常生活の中にあっと驚くすばらしい数学的アイディアがたくさん潜んでいるか、数学的発想とはどんなものかをユーモアたっぷりに語りかける。生れながらにして数学的能力がないのだと思い込んでいる人も多いが、数学ができる人もできない人も、普通に日常生活を営める人ならば、数学の基本的な能力は持っているのだから、数学ができないことを遺伝のせいにするのは間違っている。また一部の天才的な数学者は別にして「数学ができる・できないは、報われぬことになるかも知れない努力を全力を尽くして、死にものぐるいで取り組んだか否かで分かれる」と、氏は〝数学流生き方〟を情熱を込めて語りかけた。



数学的発想とはどんなものかをユーモアたっぷりに語りかける秋山氏——大学院セミナー館にて

◆

数学というのは、とかく抽象的で、温もりの感じられないものだと思われている。セミナーの二日目のシンポジウムⅢ



あたかも手品師のごとく巧みに数学を演じる何森氏——大学院セミナー館にて

（8頁につづく）

では、高校の数学教師であった『数学教室』編集局の**何森仁**氏が「**物で数を感じるファンタジア**」と題し、あたかも手品師のごとく巧みに、人間臭い、温もりの感じられる小道具を使いながら、理詰めでわかるのでなく、「ワーッわかった」と楽しく感じられる数学を演じられる。例えば、高校の微積分ですっかり数学が嫌いになったという人も多いと思うが、もし微積分の意味が紙とハサミと鉛筆を使って実感できていたら、数学者にならずともどんなに数学に親しみ、好感をもてたことだろう。「何森先生にもっと早く教えてもらっていたら、もっと数学が好きになっていた」「数学の先生もやりがいがあるかもしれない」という声が聞かれた。

数学が好きか嫌いかはともかくとして、現代生活になくてはならないコンピュータは、まさに数学の応用によってはじめて実現した高度の能力を持つ機械である。だがしかし、最近ではさらに進んで人間が作った機械であるコンピュータが人間の知的機能をどこまで実現できるかということが、哲学はじめ広範な領域で問題にされている。最後のシンポジウムⅣでは、**藤原正彦**・お茶の水女子大学教授が「**論理と情緒とコンピュータ**」と題し、最先端のコンピュータ＝人工知能の話題を提供された。

◆

四つのシンポジウムを通して、セミナーの参加者は、数学の面白さを改めて認識し、数学の本質に具体的に肌で触れ、数学の深い魅力を味わうことになった。とりわけ、数学嫌いの生徒にどうすれば数学の面白さを伝えられるか、その教え方で悩んでいる数学教師志望の参加者にとっては、大きなヒントとコツのようなものを学ぶことができたのではないか。

実感する生き生きした数字

慶応義塾大学環境情報学部3年　斉藤理佐子

数と論理のファンタジアって一体どういうことなんだろう…。こう思ったのが、今回のセミナーに参加するきっかけでした。小さい頃から数学には触れてきたけど、〝数の世界〟とはどういうものか、考えたことはありませんでした。

ご多分に漏れず、この私も、テストのため、受験のために、数学を習い、問題を解き、解法を暗記してきた人間の一人です。点数に裏付けられていたあの頃の数学は、単なる数字の羅列でしかありませんでした。しかし、このセミナー・ハウスでの数学は、実に生き生きとしていました。

例えば、数学の理解の仕方。理詰め・理論的な観点からではなく、日常生活のなかから、しかも積木、はさみ、紙などを使って、遊び心で数学を理解できてしまうなんて、素敵なことではありませんか！　「心と数学」というシンポジウムの中で取り上げられた「数もまた心の窓である」とは、まさにこのことなのだと実感しました。数学教育は本来こうあるべきです。

公式を公式として丸覚えさせるのではなく、どうしてそうなるのかというレベルに着目することの方が重要でしょう。この意味において、シンポジウムの中での様々な数学的パフォーマンスは非常に印象的でした。

また、「論理と情報とコンピュータ」というタイトルの講義でも、数が生きているということを学びました。コンピュータは、非常に高次元の数学によって成り立っているが、それがどれだけ人間に近付くことができるか、ということがここ数年コンピュータ界において問題にされています。

例えば、自動翻訳システムは、あるレベルまでの計算処理能力を持っているが、人間が判断し行動するときの基準となる常識、情緒までは読み取ることができない。そこに計算能力だけでなく、人間らしさを付け加える、すなわち、数学的要素と人間的要素をうまく重ね合わせることによって初めて、正確な翻訳システムを作り出せるのです。このような話は、人工知能を勉強している私には、何よりも興味深い内容でした。

この共同セミナーを終えて、自然の中で様々な形の数学に接することができたことは、非常に貴重な体験でした。色々な数、その中で、〝ファンタジック〟だと感じるものこそが、その人にとっての本当の数学なのでしょう。

数学の魅力に触れて

東京経済大学経済学部3年　宮島　純

数学にたいして取っ付き難いという印象を持っている者の一人として、数学の魅力を教えてくれるというこのセミナーには好奇心を抱かずにはいられなかった。「数と論理のファンタジア」のタイトルが示すように、その内容は数学の持つ隠れた側面から論理と人間との関わりにまで及び、セミナーの雰囲気と相まって幻想的にさえ感じられた。

講義の中で、論理と心理は掛け離れている、という話があった。確かに普段の生活の中で自分が論理に基づいて行動していると実感する機会は少ないだろう。我々はその場その場で最も望ましいと思うことを選択して過ごしているに違いない。でも、一旦数学という論理に支配された世界に足を踏み入れると、無駄のないその構造に自分が受け入れてもらえないのではと抵抗を感じても仕方ないだろう。とすれば論理と心理とのギャップを少しでも埋めていくことができれば、数学の魅力を感じることができそうである。

実際に我々は数多くの数学や論理と接しているが、それらを自分と関係付けられないでいるだけかもしれない。現実の世界を記述するために数学が生まれたとすれば、我々を取り巻く環境には数が溢れていることになる。数学の魅力も現実の世界と論理の世界との間にあるに違いない。例えば、数学で最短距離を求めるという問題の背景には、人が一番の近道を知りたいということがあろう。

論理の世界が支配するものの一つとしてコンピュータがある。これは記号をコントロールする機械であり、心理の世界とは相容れないものであるが、近年コンピュータと人間との距離が接近しつつあるようである。そこで問題となるのは論理が心理を肩代りできるということである。シンポジウムでは部分的には可能だが、完全にはできないという結論が出され、その根拠の一つに情緒の欠如があった。論理が情緒を持ち得ないということは当然のことのように考えられる。なぜそのように考えられるのか。論理の世界には時間というものが存在していないからであろう。また、ここに論理の世界への近寄り難さがあるのかもしれない。

短期間ではあったが、数学の魅力に触れるには十分だった。セミナーで感じられた独特の緊張感は知的な楽しみに触れた際に生じる充実感の裏返しだったのだろう。セミナー・ハウスで培われる好奇心は普段の生活では得られないものである。

若手教員に期待するもの

よりよい大学教育の方法を求めて――

昨年7月、大学の個性化を阻むことにもなりかねなかった大学設置基準が大幅に改正され、各大学の改革への取り組みに真剣さが増し、はずみがかかることになった。大学教育を魅力あるものにするためには、新しい理想と意欲にあふれる若手教員に期待するところ大である。

しかしながら、若手教員は教授法を研修する機会もなく、ぶっつけ本番で授業を担当することになる。ほとんどの教員は我流で教授法を体得し、学生の評価を知ることもなく、授業改善の機会もなく、最終講義を迎えるのではないか。果たしてこれでよいのか。

今年度第一回にあたる今回の研修は、新任または教育歴の浅い若手教員を対象に学生の学習能力の向上を直接の目的とする授業開発（Instractual Development）をめぐって開催された。なお、FDプログラム小委員会（委員長＝早稲田大学教授・示村悦二郎氏）が中心となって、教育方法等改善経費の助成を受けながら展開している当プログラムの趣旨は、単に授業改善の技術的なノウハウを伝授することだけではなく、参加者相互が啓発し合う中で大学の教育的機能に関心を持って、各人各様の能力開発をしてもらうための場を提供することである。今回は、31名・21校（東京農工・電気通信・筑波・千葉・明治・法政・立教・東京女子・武蔵工業・国際基督教・東京理科・大妻女子・芝浦工業・東海・東京電機・聖徳・亜細亜・桜美林・文教・白鷗・防衛大学校）の参加者を得て開催された。

1時間の講義に5時間分の準備

どんな大教室でもこれまで私語をさせたことがないという発達心理学が専門の当ハウス館長・**岡宏子**氏（聖心女子大学名誉教授）は、「**教師の教育的機能――教師⇄生徒の相互作用**――」と題し、開口一番「私の顔をみて聞いて下さい」と参加教員の意表をつく発言から講演を始めた。「書物でも、テレビ・ラジオでもなく、生身の私がここで話しをするのはなぜか。このことを考えてみれば、話し手と聞き手、教師と学生の相互関係のあるべき姿が理解できる。講義では聞き手の表情を見ながら、臨機応変話す内容も変えていく」という。そうしたことがはじめからできたわけではない。「新任のころは1時間の講義をするために5時間分の話す内容を準備して、講義に臨んだ。そしてさらに準備したノートはすべて家に置いて、講義にはメモだけもってあらわれる。そうすると自信のないことは話せないし、本当に考えていることだけを学生の顔を見ながら話せる。こうしたことを3年も続けていると次第に慣れてきて少ない準備でも、学生の表情を見ながら講義ができるようになる」と。

さらに、私語をさせないようにするためには学生の知的好奇心を刺激し、聞く気を起こさせる努力が必要だ。「講義をする私と聞き手の学生との間に一つの相互作用が働くようにしている。どんな刺激が与えられたときに学生は知的関心を持つようになるのか。学生が持っている既存の情報の構造に刺激を与え、組み替えを起こさせるような刺激を与えることができれば学生は講義に関心を示すようになる」と氏は大学での講義と同様に参加教員の関心を引きつけた。

教師の努力を支える制度的条件

講演の後、FDプログラム小委員会のメンバーが同委員会編集になる『FDハンドブック』を参照しながら話題提供を行なった。

まず国際政治学が専門の上智大学教授・**蠟山道雄**氏は、個々の授業について「良い授業とは何か」を一義的に定義することはむずかしいとの立場から社会科学系における授業改善の問題を中心に「**よりよい授業を行なうために**」と題し、問題提起を行なった。

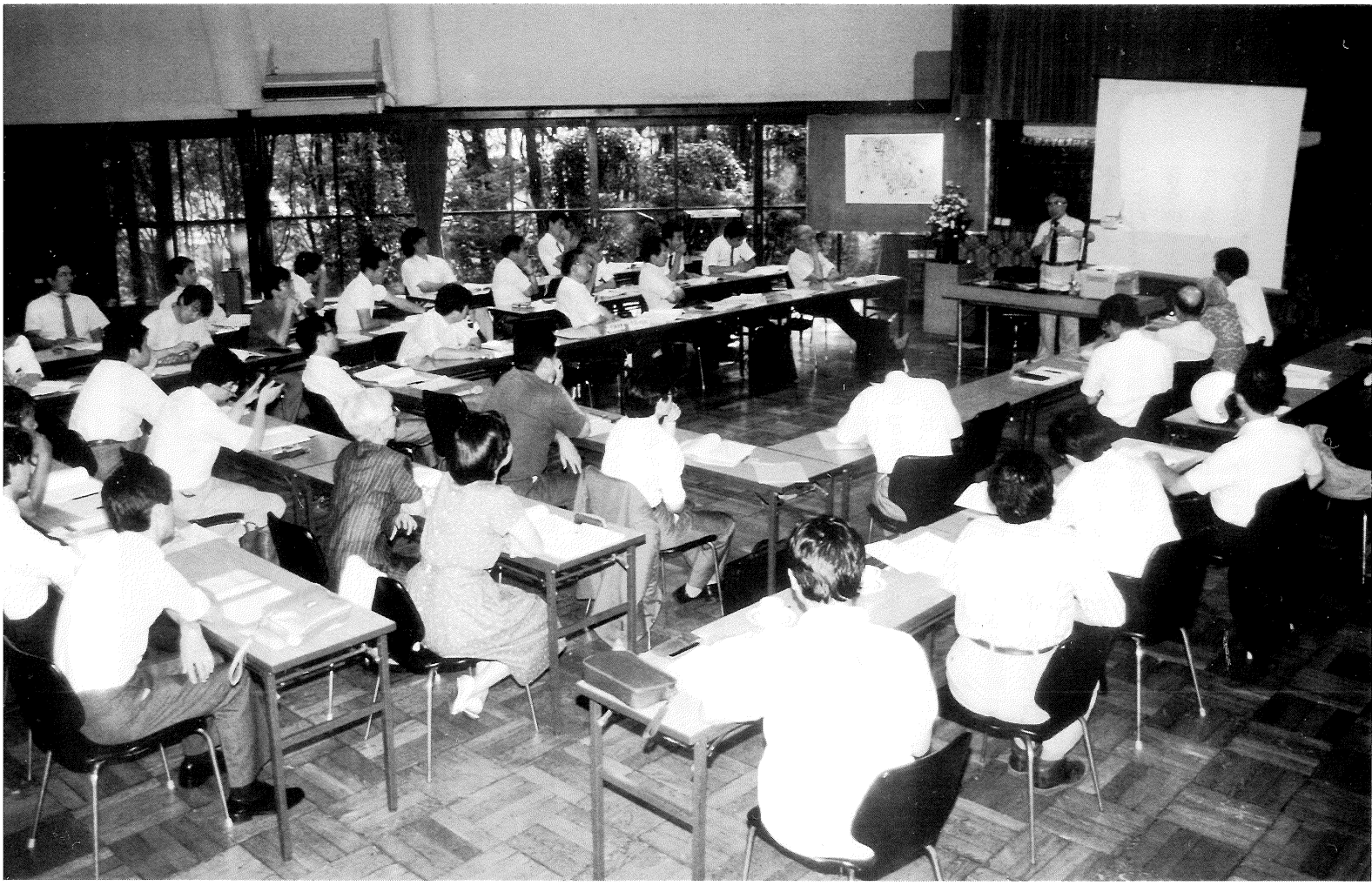
戦後の日本では、アメリカをまねて高等教育の大衆化を押し進めてきたが、戦前のヨーロッパ型のエリート教育機関としてのあり方と教員の意識はそのままだ。「もはやエリートだけを対象とする授業は通用しない。動機づけが明確でない学生に対していかに興味関心を引き起こさせるか。そのためには、教師自らが多くのエネルギーを教育に注ぐことが大事だ。しかも個人レベルだけでなく、教師相互の連携が必要だ」。しかし一方では、「OHP・ビデオなどの教育機器の完備、ティーチング・アシスタントなどスタッフの充実、指定図書を充分に揃えている教育図書館など、大学が教育のための制度的な条件を整備してこそはじめて教師個人の努力が報われ、良い授業を行なうことができるのではないか」と教師の努力に加えて、それを支える制度的条件の整備をすることの重要性を指摘された。

教師は役者、授業はワンマン・ショー

次に、遺伝学が専門の東京女子大学教授・**福田一郎**氏は「**授業をどのように計画し実施するか**」と題して、講義の導入と展開のコツ、OHPの作り方・使い方、シラバスの書き方・運用の仕方などについてご自分の体験をもとに詳細に紹介した。

こうした授業計画と準備は、研修で学ぶことができるし、教師として最低限身

（10頁につづく）



学生を講議に引きつけるには？　教師の努力を支える制度的条件とは？　教師の魅力とは？
何のために試験を行なうのか？　若手教員を中心に活発な議論が展開した——講堂にて

につける努力をしなければならないが、最終的にはいかに教師自身が授業に対する熱意や意欲をもって望むかにかかっている。いわば「授業はワンマン・ショーなのであり、教師は役者として舞台に立つのだという心構えが求められるし、観客の関心を引きつけるためには話し方、声の調子や抑揚にも注意し、時には笑わせることも必要だ」と役者としての教師の資質を開発すべきではないかと問題を投げかけた。

学生に強制してでも学習の動機づけを

最後に、数学が専門の国際基督教大学教授・**絹川正吉**氏は「**試験で何を測定し、どう評価するか**」という発題の中で、試験と評価というテクニカルな問題が大学の本質的な営みといかに密接に関連しているかについて指摘。

「そもそも試験をし、評価をするのは学生に強制してでも学習の動機づけをするためではないか。だからただ試験をすればよいというものではないし、期末試験一本で済ませてしまうのでは全く意味がない。試験の回数は多いほど良いのである。また出題にあたっては、易しいのだけれども易しいものだとはわからないように、しかも学生の知的好奇心を刺激するものが良い。ただ重要なことは、試験と評価が本当に意味のあるものであるためには、大学教育の目標が明確になっていなければならない」と指摘された。

三氏の発題の後、FDプログラム小委員の早稲田大学教授・**示村悦二郎**、電気通信大学教授・**中田良平**、東京学芸大学教授・**宮腰賢**、お茶の水女子大学教授・**中島利誠**、立教大学助教授・**佐々木一也**の五氏がファシリテータとなって、分科会に分かれて自由闊達な意見交換を行なった。若手教員に混じってベテラン教員の参加もあり、学内ではなかなかできない世代間のまたとないコミュニケーションの場ともなった分科会では「何が若手教員に期待されているのかわからない」「学年が進むにつれて学生の能力が低下していくような気がする。もしかしたら大学が学生をスポイルしているのかもしれない」「専門課程の教師と教養課程の教師では学生への接し方が異なるのではないか」など様々な意見が出され、活発な討議が展開された。

研修終了後、参加教員の一人から「参加された先生方の熱意に支えられ、教務担当という職務柄参加した私も、大変に啓発された。これまで授業や試験といえばその場限りの工夫で切り抜けてきたが、後期からは少し違った心構えで講義に臨みたい」との感想が寄せられた。

大学教員だからといって誰でも先天的に教育能力を持っているとは限らない。教員個人が見様見真似で教育能力を習得していくのでは充分とはいえない。現代の大学はますます教育機能の重要性が増しつつあり、組織的な対応が迫られているといえよう。

平成4年度 常務理事会・臨時理事会

左記の通り開催され、ハウスが当面する諸問題が検討された。（敬称略）

▽第1回常務理事会
'92年6月3日／神田・学士会館
〔出席者〕（常務理事）佐野博敏、末松安晴、鈴木皇、三宅彰、宇野重昭、（法人）中川秀恭理事長、岡宏子館長、小岩健介専務理事

▽第2回常務理事会
'92年6月29日／青学会館
〔出席者〕（常務理事）佐野博敏、三宅彰、宇野重昭、（法人）中川秀恭理事長、岡宏子館長・専務理事

▽臨時理事会
'92年7月13日／アルカディア市ヶ谷
〔出席者〕中川秀恭、岡宏子、佐野博敏、岡野加穂留、宇野重昭（委任状による者＝15名）

平成4年度 第1回FDプログラム小委員会

'92年4月10日／青学会館

〔出席者〕絹川正吉、宮腰賢、示村悦二郎、中島利誠、福田一郎、中田良平、原一雄、蠟山道雄、佐々木一也（敬称略）
〔ハウス側〕岡館長、小岩専務理事、企画室スタッフ1名。

◆

●主な議事
（1）新委員の就任
蠟山道雄（上智大学教授・国際政治学）、佐々木一也（立教大学助教授・哲学）の2氏。
（2）正副委員長の選出
委員長には示村悦二郎氏（再任）が、副委員長には原科幸彦（新任）、中田良平（同）の両氏が選出された。
（3）第4回大学教員研修プログラムの企画
（4）平成4年度教育方法等改善経費の要求
（5）平成5年度大学教員研修プログラムの開催日について
第6回……'93年8月26日～27日
第7回……'94年1月22日～23日
（6）大学教員研修プログラムの参加経費について
（7）FD文献の収集について

第2回FDプログラム小委員会

'92年5月31日／当ハウス

〔出席者〕絹川正吉、宮腰賢、示村悦二郎、原科幸彦、坂井昭宏、中島利誠、福田一郎、原一雄、蠟山道雄、佐々木一也（敬称略）
〔ハウス側〕岡館長、小岩専務理事、企画室スタッフ2名。

◆

●主な議事
（1）募集資料の印刷について
改善経費を利用して外注する。また、各大学の事情に合わせ、案内送付を効果的に行なうことになった。
（2）大学教員研修プログラムのニュース記事について
『セミナー・ハウス』ニュースにFD活動、授業改善の実例などを囲み記事で毎号掲載する。
（3）研修参加者へのサービスについて
研修終了後も、セミナーの案内などを送付し、何らかの形で連絡を保つようにし、将来的には会員組織を発足させる方向で検討する。
その他、絹川・原両委員から研究報告があった。

平成4年度 第1回国際プログラム委員会

'92年5月15日／青学会館

〔出席者〕渡辺昭夫、宇佐美滋、竹田いさみ、今井圭子、梶田孝道、古賀正則、中井和夫、樋口洋一郎（敬称略）
〔ハウス側〕岡館長、小岩専務理事、企画室スタッフ2名。

◆

●主な議事
（1）新委員就任
梶田孝道（津田塾大学教授・国際社会学）、熊本一規（明治学院大学助教授・環境科学）、古賀正則（一橋大学教授・社会地理学）、佐藤英夫（筑波大学教授・国際政治経済学）、竹中平蔵（慶応義塾大学助教授・経済政策）、中井和夫（東京大学助教授・国際関係論）、樋口洋一郎（東京工業大学助教授・社会経済ネットワーク論）の7氏。
（2）正副委員長の選出について
委員長には渡辺昭夫氏（再任）が、副委員長には宇佐美滋（再任）、竹田いさみ（新任）の両氏が選出された。
（3）第18回国際学生セミナーの実施報告
（4）「国際学生セミナー20回記念・同窓会セミナー」準備委員会の発足について
来年の20回を記念して、OB・OGを中心にセミナーを企画し、それを契機に参加者のネットワークを広げることを趣旨に準備委員会を発足させた。

平成4年度 第1回大学教員懇談会企画委員会

'92年6月11日／青学会館

〔出席者〕小池生夫、示村悦二郎、原科幸彦、岡村浩、高倉翔、福田一郎、前沢三郎、石黒哲郎、建部正義、戸張よし子、西脇威夫、平野健一郎、富士昭雄、安岡高志、池内輝雄、中西又三（敬称略）
〔ハウス側〕岡館長・専務理事、企画室スタッフ2名。

◆

●主な議事
（1）新委員の就任
池内輝雄（大妻女子大学教授・国文学）、中西又三（中央大学教授・行政法）、村上陽一郎（先端科学技術研究センター教授・科学技術史）の3氏。
（2）正副委員長の選出
委員長には示村悦二郎氏（新任）、副委員長には原科幸彦（再任）、宮腰　賢（新任）の両氏が選出された。
（3）大学教員懇談会の参加教員の募集について

平成4年度 第1回共同セミナー委員会

'92年6月26日／アルカディア市ヶ谷

〔出席者〕川端香男里、西村圭子、野崎昭弘、池田清彦、宇波彰、菊地京子、柴坂寿子、島薗進（敬称略）
〔ハウス側〕岡館長・専務理事、企画室スタッフ3名。

◆

●主な議事
（1）新委員の就任
宇波　彰（明治学院大学教授・現代思想）、菊地京子（津田塾大学助教授・社会人類学）、柴坂寿子（お茶の水女子大学講師・人間行動学）、島薗　進（東京大学助教授・宗教学）の4氏。
（2）正副委員長の選出
委員長には川端香男里氏（再任）、副委員長には桜井哲夫（再任）、野崎昭弘（同）の両氏が選出された。
（3）平成3年度教育プログラムの総括
（4）第158回大学共同セミナー「となりの異邦人」の実施報告
（5）第159回大学共同セミナー「数と論理のファンタジア」、第160回大学共同セミナー「身体運用の妙をさぐる」の準備状況
（6）セミナーの出版について
（7）第161回以降のセミナーの企画について
「国際政治経済学の可能性を求めて」「ゆらぎの科学」「生命科学」「社会現象としての宗教」「資本主義の行方」「自由の現在」などの企画案をめぐって協議した。

訃報

元専務理事岡山猛氏が、病気療養中のところ、8月23日永眠されました。71歳。筑摩書房社長のあと、'79年7月、永井道雄、加藤一郎両氏らの推挙により当ハウスの専務理事に就任、'82年12月まで3年6ヵ月間在任されました。謹んで哀悼の意を表し、ご冥福をお祈り申し上げます。

千人会

'92年6月～8月

◆現在会員一、四四九名（実会員数）

◆新しく会員となられた方々

C　大学セミナー・ハウス前専務理事　小岩　健介殿

B　荒川区立西日暮里保育園　森　玲子殿

A　聖徳大学教授　浅見　千鶴子殿

◆会費ありがとうございます

蓮見音彦、原治、三浦徳弘、今堀和友、松井源吾、小畠守生、北郁子、中川作一、古畑和孝、板倉譲治、山下肇、角田稔、佐藤進、野沢浩、宅間宏、鈴木一郎、近藤裕、柴田勇造、森川八洲男、西川治、北野美枝子、廣田達衛、高橋忠次郎、宮川彰、岡田正弘、川添利幸、大内力、柳下勇、正田亘、竹内喜代司、嶺哲之助、西勝、林邦夫、芳野赳夫、小岩健介、中嶋嶺雄、望月継治、吉田幸弘、江沢洋、和田英一、福山直美、鳥海俊宏、吉松藤子、奥村敏恵、千野熊男、石川信男、武者利光、金子晃、中野スミ子、阪本泉、臼井久和、黒田成俊、林泰造、林卓男、川田侃、秀村欣二、笹森健、小倉充夫、佐久間まゆみ、原田富士雄、阿部斉、常行敏夫、栗林恒雄、石川達雄、松平文朗、秋間実、名東孝二、高山旭、山岸健、立川明、長清子、石坂巌、見田宗介、高橋勇悦、高橋浩爾、二谷貞夫、辻達也、中村哲哉、讃岐和家、浅川淳、岡沢憲芙、入江和生、鈴木二郎、大塚久雄、三橋文雄、簗田長世、慶谷伸代、田島恵児、山西貞、太田善麿、中村進、柴田政利、石井進、金子六郎、中村幸安、村瀬興雄、松島恵、松尾秀雄、藤平重雄、長浜洋一、橋谷卓成、中村登志哉、安宅光雄、厚東偉介、中村浩三、中島章、金谷憲、小池滋、三和治、黒田道雄、布施涛雄、角瀬保雄、吉田美穂子、橋本智、大熊徹、千羽喜代子、岡宏子、鈴木成文、梅沢豊、山本茂、窪田富男、三宅彰、柏木恵子、三輪公忠、今井義夫、色川大吉、奥田夏子、藤原鎮男、五十嵐香、小池生夫、宮川俊彦、福井正紀、宮本瑞夫、品川孝次、川原啓美、橋本研一、大吉芳彦、原誠、五十嵐武士、古関彰一、村上光雄、稲田拓、芥川龍男、小川信子、鹿島健次、林明夫、熊田陽一郎、伊藤清子、中山光雄、瀬田裕司、柴田誠、仙田哲、阿久津喜弘、新井勝紘、村田全、西村敏男、松瀬貢規、原島幸太郎、扇谷尚、岡本剛、村松暎、村田光二、志賀英、市川博、土田美芳、白濱謙一、原田行男、浅井邦二、伊藤一郎、福山仙樹、滝幸三郎、森田明、長内了、八幡義博、国岡昭夫、大野澄子、増田茂樹、田中弥寿雄、山本武彦、関田寛雄、大河内繁男、岡村文子、寺川国秀、荻原洋太郎、大蔵隆雄、松村信治郎、小沢重男、中島文夫、楢林博太郎、下田弘。（敬称略）

◆千人会員からのたより

十年来のゲーテ『ファウスト』（六月刊）訳業の追い込みに忙殺され、一月遅れになってしまいました。私の現職で何かお役に立つことがあればと思います。

東京大学名誉教授　山下　肇

◇

定年退職の後、自宅にて研究、執筆をしています。セミナー・ハウスの活動に参加した頃が偲ばれます。

専修大学名誉教授　高橋忠次郎

◇

六十五歳の誕生日を迎え心から感謝して居ります。中国語の勉強をしたり多くの集りに出席したり人との出逢いを楽しみにしています。

嶺哲之助

◇

四十年以上おりました中央大学を昨年定年退職、元気でほどほどの仕事をしながら過ごしております。

林泰造

◇

傘寿の祝いのお言葉をお添え頂いたカード有難く拝見致しました。三月末日で東洋英和短大学長を任期満了退職しました。

秀村欣二

◇

数ケ月、ヨーロッパですごし、風景を楽しみました。

慶応義塾大学教授　山岸　健

◇

一度機会をみて、院生とゼミ合宿にでかけます。

上越教育大学教授　二谷貞夫

◇

昨年は一年間日本政府の海外援助（JODC）の依頼で、インドネシアで誕生日を迎え、会費を送れず失礼しました。

中村技術士事務所　中村哲哉

◇

誕生日祝いのカードを頂き有難うございました。学問には定年がありませんのでもう一頑張りしたいと思います。

田島恵児

◇

お書きそえ下さいました岡先生のお言葉、嬉しく拝読いたしました。

お茶の水女子大学名誉教授　山西　貞

◇

今年も学生を連れて伺うつもりが、遠すぎるという事情で、近い伊良湖でゼミの合宿をすることにしました。あしからず。

名城大学教授　松尾秀雄

◇

混乱のベルリンから帰国して半年。慌しいながら平和な東京の生活に、居心地の悪さを感じています。

共同通信社記者　中村登志哉

◇

学生のインター大会の時期から、本年もまた12月の最終日近くに合宿でお世話になると思います。オモチをいただくのが、これで3～4回目になりそうです。年末のオモチ代としてや、多目に送りました。

立正大学教授　厚東偉介

◇

館長が千人会員ひとり一人を覚えて誕生カードを送って下さる姿に心をくだかれ、永らく休んでいた会費を納めます。

桜美林大学　布施涛雄

◇

四月一日より日本カナダ学会会長をつとめております。秋の大会は「新無国境時代のカナダ」としました。

上智大学教授　三輪公忠

◇

岡先生。七月～九月にかけてチベットの奥地カイラース山（六七〇〇メートル）に行って参ります。

東京経済大学教授　色川大吉

◇

教会のボランティヤーとしてフィリピンミンダナオで、67回目の誕生日を迎えます。南の島の子供に平和の光が訪れるようお祈り下さい。

村上光男

◇

永いこと入院しておりました。四月に退院、目下療養中です。

原島幸太郎

◇

大学の在り方が問われている時、研究・教育の交流の場として、貴セミナーの果している役割は大きい。ますますの発展をお祈りします。

横浜国立大学教授　市川　博

◇

私こと、三月末日をもって東大を定年退官しました。些少ですが感謝のしるしとして、一万円送ります。

帝京大学教授　古畑和孝

◇

どこにも勤めておりません。どこかに行かねばならないという小学校以来の状態からの解放を楽しんでいます。出かけるのは自由意志の散歩のみです。

元東京外国語大学教授　簗田長世

◇

来年三月に開室する歴博の近現代展示の準備に追われています。三多摩の自由民権運動を展示する予定です。

国立歴史民族学博物館助教授　新井勝紘

寄付金報告

'92年6月～8月

〈一般寄付金〉

五、〇〇〇円　駒沢大学教授　荒井良雄殿

一〇、〇〇〇円　東京理科大学　大澤綱一郎ゼミ殿

五、〇〇〇円　東京都立立川短期大学　茶道講師　勝山宗松殿

〈植樹〉

あんず二株　国際基督教大学　心理学サマーセミナー殿

〈現物〉

物置一棟　大学セミナー・ハウス食堂殿

傘（セミナー・ハウス名入り）一〇〇本　日本司法書士会連合会殿

業／務／通／信

'92年6・7・8月 夏3ヵ月の合宿研修から

暑さにもめげず、この丘で熱心に研修スケジュールをこなした方々は、この夏3ヵ月で計一万四、〇六二人（282グループ）。その中から、今年20年目を迎えた「大学間交流」の試み、年々多彩となる「国際交流」などにスポットを当ててみた。

●20周年を迎えた十大学合同セミナー

十大学合同セミナーが今年ついに〝成人式〟を迎えた。これを祝して、この春4月、都心で20周年記念式典が歴代の指導教授、実行委員、関係者を集めて開催され、そして6月、第20回セミナー「岐路に立つ世界―統合と分裂―」（参加者は177名）が実施された。

20年前の'73年4月、七大学（慶応、ICU、上智、成蹊、聖心女子、津田塾、一橋）の外交史・国際関係論専攻のゼミが連合して行った第56回大学共同セミナー（参加者は60名）が、この合同セミナーの前身である。4回目からは当ハウスの手をはなれて自主ゼミとなり、大学数も明治、神奈川、早稲田が順次加わって十大学へと成長した。

このセミナーの誕生は、新しい大学間交流のモデルケースとして注目された。他大学のゼミとの共同学習による研究の深化、実行委員を中心とする学生の自主的な組織運営――それは当ハウスがそれを目ざして創られた「大学を開く」ことの実践であり、その先駆であったからである。それだけにこの〝自主ゼミ共同体〟の継続・発展「20年」の意義は大きく、これを支えてこられた関係者の方々に心から敬意を表し、感謝申し上げたい。

これを機会に、本号の〈わたしたちの合宿〉（**下掲**）には、当初から精力的に学生の指導や運営の助言に当ってこられた先生のお一人、宇野重昭・成蹊大教授と第20回セミナーの窪田朗・実行委員長のお二人にご寄稿いただいた。

●多彩な国際集会・訪日研修グループ

夏3ヵ月、ハウスが迎えた国際集会と訪日研修グループは計11。盛んな国際交流が展開された。このうち、①第13回日豪合同セミナー②第7回日韓学生会議③建築セミナー'92に参加したペンシルベニア大学建築学科の大学院生たち④日本の経済・経営セミナー（CIEE）のオリエンテーションで来泊した米国23大学の学生たち――については**次頁**のグラビア〈CULTURAL INTERFACE〉でご紹介した。

国際医薬品情報誌協会（ISDB）主催のサマースクール「くすりと健康を考える国際会議」は、発展途上国の医師、薬剤師らを対象に、アジアで初めて開かれた異色の国際セミナー。15ヵ国からの40名が5泊した。終始この集会を推進されたISDB副会長の別府宏圀氏（東京都立北療育医療センター副院長、八王子市在住）に別掲の一文（**次頁**〈私の国際交流〉）をお寄せいただいた。

わたしたちの合宿

20年目を迎えた十大学合同セミナー
学生プラス教授の合同ゼミ
――企画も運営もすべて学生たちで――

成蹊大学教授　**宇野重昭**

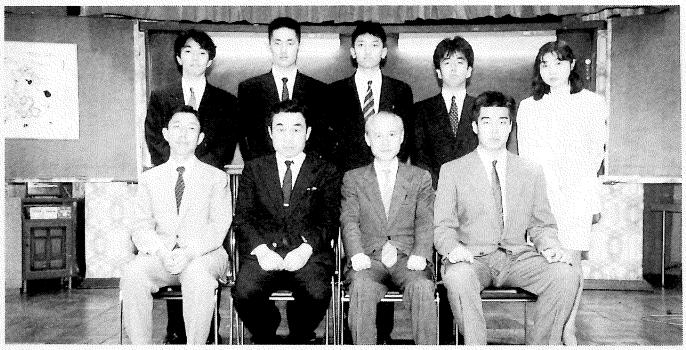
国際関係学というものは、あまり体系のきちんと確立したものではない。だから学生も自由に〝学問〟が行なえる。それがこの十大学合同セミナーの出発点であった。

20年前といえば、学園紛争で各キャンパスが混乱していた時期である。しかし混乱していたからこそ、新しい試みも可能であり、偏見にとらわれず、大学間の垣根を越えることができた。大学セミナー・ハウスがその場を提供してくれたのも、幸運であった。

こうして新しい国際関係学のありかたを求めて教授と学生とが自由に合同ゼミを行なう条件がととのえられた。いや、教授と学生というより学生プラス教授というべきであろう。なぜなら企画も運営も、すべて学生の手によって行なわれるようになってきているから。

いま勉学にたいする学生の意欲は極めて高い。「いまどきこんなに勉強に熱心な学生のグループがあるとは」とは、十大学の学生集団を見たある人の感想である。私にとっても、学生を知るため、講義の準備をするため、そして国際関係学の新しいアイディアを得るためにも、この十大学合同セミナーは有意義である。

このような学生の勉学共同体が次の世代にどのように引き継がれていくのか、今からそれが楽しみである。



20年を迎えた十大学合同セミナーの指導教授（前列左から池井優、三宅正樹、宇野重昭の各氏）と実行委員ら（前列右端が窪田朗実行委員長）

学生時代最高の思い出

第20回十大学合同セミナー実行委員長
慶応義塾大学池井ゼミ4年
窪田　朗

昨年9月、第20回十大学合同セミナーの実行委員長という大役を引き受けて以来、総括合宿成功に向けて、二百人もの学生にトータル・テーマである『岐路に立つ世界～統合と分裂～』を、どう勉強させ、議論させ、そして理解させるかを連日連夜執行部と話し合ってきた。

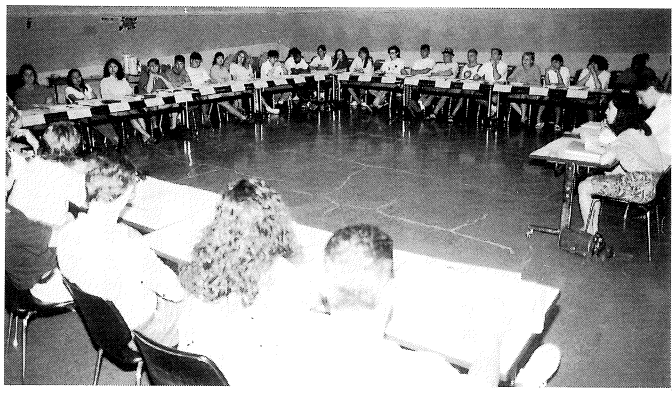
このセミナーは、学生が自主運営するとともに、他大学との共同研究の場である。そのために、通常の学内のゼミ活動以上に苦労が多い反面、学ぶことも多い。だからこそ、この一年間の委員長としての経験は、学生時代最高の思い出であり、人生の大きな財産になるだろうと確信している。来年もまた、八王子の静かな森で、明日の世界を担う学生たちの熱い議論が繰り広げられることを期待して止まない。

この夏の国際交流から

第13回日豪合同セミナー　今年のテーマはMY AUSTRALIA！YOUR AUSTRALIA？　12分科会に300人が参加。R・ダルリンプル駐日大使も開会式で挨拶した（'92.6.6）

ペンシルベニア大学建築学科の大学院生たち　今年は建築セミナー'92（新日本建築家協会主催）参加を兼ねて来泊。T・アトキン教授と学生たちは遠来荘でこの夏6週間の「日本体験」の成果を分かちあった（'92.6.20）

日韓学生会議　「自己をもって日韓を語ろう」をメイン・テーマに六つの分科会で討論。'85年以来、東京とソウルで交互に開催（'92.8.4）



日本の経済・経営セミナー　恒例CIEE主催の滞日研修。来日直後のオリエンテーション合宿で紹介し合う米国23大学38名の学生たち（'92.8.27）

私の国際交流

より良い治療を求めて
――アジアで最初のサマースクール――

国際医薬品情報誌協会副会長
「正しい治療と薬の情報」編集代表
別府宏圀

企業から医師に提供される医薬品情報は、科学的な事実を伝えることよりは、「商品」としてのイメージを高めることに重点がおかれている。こうした状況にあって、欧米先進国では、早くからインデペンデントな医薬品情報誌が生まれ、薬の広告を一切載せず、偏りのない情報を医師達に伝える役割をはたしてきた。

このような情報誌が、相互の協力を目的として、国際医薬品情報誌協会（ISDB）を結成したのは7年前のことであった。以来、様々な形で、適正な薬物治療の普及活動を行ってきた。

しかし、最も深刻な問題は、こうした組織を持たない発展途上国にある。ISDBが発展途上国の医療関係者を対象としたセミナー（サマースクール）を開くようになったのは、このような理由からである。

イタリア、アルジェリアに次いで開かれた今回第3回目は、アジアで最初のISDBサマースクールとあって、アジア、中近東から多数の応募者があった。講師陣は英、仏、豪、ニュージーランドから医師、薬剤師を招き、7月20～24日の5日間にわたる熱心な討議と演習を行なった。参加各国の間には、文化、医療制度、経済力などに大きな差異があり、今後の国際協力を推進するには多くの難問があることを知った。課外時間にも、食事や散策をともにしながら、実に多くのことを学ぶことができた。

深い緑に囲まれた静寂な環境と、簡素な中にも温かみのあるセミナー・ハウスの雰囲気、スタッフの方々の飾り気のないもてなしには、参加者全員が賞賛を惜しまなかったことをお伝えし、感謝の言葉としたい。

利用状況

＊＝同月2回利用
＊＊＝同月3回利用
日帰りを除く

■**6月**（85グループ、延四、五六九人）
中央大学助教授　中川洋一郎
大妻女子大学短期大学部実務英語科新入生オリエンテーション　郭　洋春
立教大学講師　杏林大学新入職員研修　森　康彦
東京工業大学中浜・平尾研究室　宮野　彬
明治学院大学教授
慶応義塾大学教授
東京学芸大学幼児教育学科新入生オリエンテーション　桐山　昇
中央大学助教授　森川　英正
慶応義塾大学教授　栗原　彬
立教大学教授
慶応義塾大学ステップスミュージカルカンパニー
東京都立大学建築学科新入生オリエンテーション
駒沢大学合同ワークショップ　柳沢　治
東京都立大学教授
明治学院大学教授　平島　成望
明治学院大学教授　田村　剛
東海大学教授　師岡　孝次
慶応義塾大学講師　安藤　寿康
東京理科大学狩野・高橋ゼミ
中央大学学生相談室
東京大学助教授　寺田　実
帝京大学米国学生夏期セミナー　林　大樹
一橋大学助教授　石川　晃弘
中央大学教授　土方文一郎
立教大学教授　谷敷　正光
駒沢大学助教授　投野由紀夫
東京学芸大学講師
帝京山梨看護専門学校
都留文科大学助教授　畑　潤
東京商船大学在学生オリエンテーション
創価大学社会学科5ゼミ合同合宿
日本女子大学附属高等学校
日韓学生会議
第158回大学共同セミナー
第20回十大学合同セミナー
第13回日豪合同セミナー
日本機械学会モード解析研究会
大学天文連盟変光星分科会
からだとことば研究所
ライフミニストリーズ
新日本建築家協会関東甲信越支部
ルソール合奏団
山王教育研究所
国際教育交流協会
日本インフォメーション・エンジニアリング／CSK＊＊＊／日立電子サービス／コニカ／テクニカル・サプライ／雪印乳業／ヒューマンライフセンター／東芝メディカル＊／ヘアーサロンフェーセス／薬日本堂／丸美屋食品工業／中村屋／東京海上システム開発／三菱電機／ミクプランニング／栗田工業／東京都江東通勤寮／東都生活協同組合＊／京セラ／日電アネルバ／日本電気／オータ／オリンパス光学工業／東京花王販売／日本分光／チャンピオン美容室／京王アートマン
（個人利用）
安田精工＊　金井ハツエ
大阪市役所　根来　譲二
佐賀教会　石原　信良
NTT多摩中支店　山口　弘和
クオリティマネジメント　森　彰

■**7月**（84グループ、延四、九八〇人）
東京外国語大学教授　宇佐美　滋
東京農業大学講師　大久保　武
東京学芸大学助教授　渡辺　道子
東京外国語大学教授　若林　俊輔
日本大学教授　佐藤　経明
東京学芸大学助教授　宮崎　義憲
国際基督教大学心理学サマーセミナー
国際基督教大学助手　袰岩　秀章
お茶の水女子大学文教育学部新入生セミナー
お茶の水女子大学理・家政学部新入生セミナー
千葉大学助教授　菅原　憲二
慶応義塾大学一年A組第三グループ
東京大学教授　見田　宗介
早稲田大学コンツェルト
お茶の水女子大学助教授熊谷　圭知
東京理科大学狩野・高橋ゼミ
東京理科大学二部物理研究部
中央大学教授　菅原　彬州
中央大学助教授　松井　豊
東京大学教授　平野　敏右
中央大学教授　池田　正孝
恵泉女学園短期大学英文学科総合科目「国際」
東京都立大学助教授　日向野幹也
学習院大学ドイツ文学科合宿
中央大学教授　塩見　英治
中央大学講師　宮園　久栄
学習院大学教授　門脇　卓爾
千葉大学教授　田中　國昭
東京工業大学教授　大津　元一
東京大学講師　川人　博
明治学院大学助教授　平岡　公一
駒沢大学教授　寺中　良二
千葉商科大学教授　影山　僖一
東京大学国政セミナー
立教大学教授　山田耕之介
中央大学通信教育部
明星大学通信教育部
創価大学教授　山口　和子
和光大学インド文化研究会
八千代国際大学長谷川・杉山合同ゼミ
大月短期大学教授　村越　洋子
山梨大学助教授　八束　厚生
多摩大学教授　井上　宗迪
東京芸術大学吉坂研究会
東京都立神代高等学校
第159回大学共同セミナー
占領史研究会
筑波大学インターカレッジ人間関係ワークショップ・リユニオン
生物物理若手の会
日本精神科看護技術協会
日本ワイルド協会
ローラシアン・インスティテューション
日本ルーテル教団神学院
万葉集の会
信頼性ワークショップ
からだとことば研究所
東京多摩いのちの電話

新入生オリエンテーション合宿実施状況

平成4年6月～7月

学校名・学科名	参加人数		
● 6月（3グループ）			
大妻女子大学短期大学部・実務英語科	173	（9）	
東京学芸大学・幼児教育学科	26	（5）	〈2〉
東京都立大学・建築学科	81	(23)	
● 7月（2グループ）			
お茶の水女子大学・文教育学部	266	(25)	
お茶の水女子大学・理・家政学部	306	(22)	
計　5グループ（4校）	852	(84)	〈2〉

平成4年度（4～7月）の集計

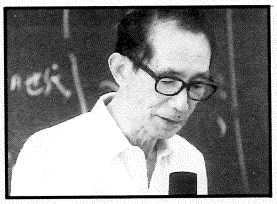
計	64グループ・27校
実人数	9,589（759）〈643〉
延人数	11,827（802）〈755〉

（注1）参加者数の（　）内は教職員，〈　〉内は上級生でともに内数。
（注2）宿泊参加者の延人数11,827人は過去最多であり，同期間の総宿泊利用者の47％である。

●追悼・熊谷孝先生●

切り離せないハウスとの関係

国立音楽大学教授　**荒川有史**



文学教育研究者集団（文教研）の年間研究体制は、大学セミナー・ハウスの存在と切り離して考えることができません。

この研究活動の中核であり、推進役であったのが、わが熊谷孝（国立音楽大学名誉教授）先生でありました。先生は、国立音楽大学在職中に、文芸思潮ゼミの中間総括を大学セミナー・ハウスで行ない、集中と持続の可能な合宿体制に、深い関心をお持ちになりました。フロントの方々や食堂の方々の献身にも心打たれるものがあったようです。

それまで、文教研は合宿や全国集会の会場さがしに四苦八苦しておりました。先生の助言は、まさに渡りに舟。六九年の十二月が、セミナーと文教研との最初の出会いです。九二年八月の第41回全国集会まで、この関係は持続して参りました。

この間、先生がお休みしたのは、九〇年十二月、急病による入院のときだけ。その先生が、九二年五月十日永眠。八十歳。先生のいらっしゃらないはじめての全国集会。熊谷理論の継承と発展をめざす第一歩でもありました。

注「文教研」とハウスとのご縁は23年。冬・春・夏の集会は通算82回を数える。その間常にその中核的存在で、ハウスのよき理解者でもあられた熊谷先生のお姿は、この夏の全国集会にはなく、講堂の片隅から、変らぬ眼で集会を見守る先生の遺影があった。ハウスから感謝の生花が捧げられた。謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

こひつじ学園
医薬品・治療研究会
日本福音ルーテル教会
東電学園大学部
ネイチャーゲーム研究所
文学教育研究者集団
安川電機／日本分光／丸美屋食品工業＊／CSK＊＊／NTT多摩中支店／東京海上システム開発／沖電気工業／東京花王販売／クレディセゾン／東急ホーム／横河メディカル労働組合／農林水産省バイオテクノロジー課／経営コンサルタント協会／不二サッシ／東京プロフェッショナル・アカデミー
（個人利用）
沖縄天久神の教会　折田　政博
日本獣医畜産大学助教授　松木　洋一
　　吉本　昌司
V研究会　T・D・ページ
ロゴス教会
■8月（113グループ、延六、六三三人）
東京学芸大学助教授　並河　一道
一橋大学教授　柴川　林也
東京工業高等専門学校韓国専門大学研修生　大澤綱一郎
東京理科大学教授
文教大学女子短期大学部英語英文科
桜美林大学教授　柳原　敦夫
筑波大学教授　松原　達哉
武蔵工業大学助教授　土井　雅博
東京学芸大学助教授　金谷　憲
国際基督教大学教授　立川　明
法政大学助教授　尾川　浩一
桜美林大学助教授　井上　雍雄
明治学院大学教授　増田　茂樹
東京都立立川短期大学茶道部
法政大学教授　大山　博
青山学院大学教授　笹森　健
学習院大学教授　江沢　洋
中央大学通信教育部
武蔵大学教授　増田　實
杉野女子大学家庭科教育研究会
明星大学通信教育部
駒沢大学教授　寺中　良二
法政大学法学部学術団体
筑波大学インターカレッジ人間関係ワークショップ・リユニオン
東京学芸大学助教授　木村　茂光
東京理科大学教授　石井　忠浩
芝浦工業大学教授　藤澤　好一
高千穂商科大学ゼミナール連合本部
桜美林大学社会科学研究会　川口　喬一
筑波大学教授
東京学芸大学文章文法研究会
明治大学英語研究部
白梅学園短期大学同窓会セミナー
早稲田大学理工学部英語会
筑波大学人間関係ワークショップ
群馬大学教授　稲村　実
千葉工業大学講師　小山　正晴
インターナショナルスクールオブビジネス
昭和音楽大学オペラ研究会
日本学術院大学校学長　中西昌太郎
二松学舎大学教授　石川　忠久
十文字学園女子短期大学箏曲部
産能大学助教授　根来　龍之
玉川大学教授　田中　宏
東京神学大学公開夜間神学講座
武蔵野女子学院
放送大学講師　川東　仁
神奈川大学助教授　深澤　俊昭
佼成学園高等学校数学研究同好会
神奈川県立津久井高等学校演劇部
社会医学技術学院
郡内研究会
フランス語応用普及協会＊
日韓学生会議
大学生ITC
数論セミナー
関東学生オリエンテーリング連盟
アイセック早稲田大学委員会
第4回大学教員研修プログラム
関東高分子若手研究会
デカルト研究会
国立高等専門学校協会教官研究集会
国際教育交換協議会
言語研究会
MIMOS会議
日本語教育学会
CISV日本協会
文学教育研究者集団
子どもとつくる生活文化研究会
海老名教会
相模原ホーリネス教会
高橋聖書研究会
日本基督教団出版局
行人坂教会
ネイチャーゲーム研究所
日本友和会
東京韓国人教会
早稲田無教会集会
モラロジー研究所
ライフミニストリーズ
英語教育協議会
東京都高等学校英語教育研究会
青山心理臨床教育センター
日本科学史学会生物学史分科会
仙川キリスト教会
障害児教育研究会
品川区私立幼稚園協会
人間の性教育研究協議会
東日本旭化成建材／小松ゼノア／ヒューマンライフセンター／あすなろ会＊／多摩更生園労働組合／栗田工業＊／大東京火災海上保険／日電アネルバ／国際交流サービス協会／クオリティマネジメント／コニカ／多摩中央信用金庫武蔵境支店／多摩中央信用金庫村山支店／色彩学校／国際商事法研究所
（個人利用）
上智大学教授　本間　英世
東京外国語大学教授　山之内　靖
江東区立深川第四中学校　南出　新治
　　金井ハツエ
安田精工　山本　泰彦
東京工業大学教授

●館長室から●

「秋」の号の編集をしておりますうちに、黄葉は次々に葉を落とし、冬木立へと変わってしまいました。

満載の記事でもおわかり下さると思いますが、各種セミナーは、諸先生方の並々ならぬ御肩入れとまた創意とによって、それぞれユニークな味のあるものになりました。

「となりの異邦人」では、今ホットな外国人労働者問題に対する日本社会、日本人のあり方に心揺さぶられつつ討論、「数と論理のファンタジア」では、考えてもみなかったサイドからの「数」の面白さに、参加者は沸き返りました。大学教員研修プログラムでも、講師と研修者が一つになって、「大学教員のあり方」を考える熱気に満ち溢れた情景を繰り広げましたことを表紙からお汲み取りください。

このような集う者との楽しくも意気に溢れる体験の共有の中で、改めてハウスの存在意義を肌身に感じます。このことが、やれ本館の雨もりだ、浄化槽や井戸の大修理だと、次々におこってくる施設の老朽化による問題を、ぼやくよりも効率良い手をどう打つかを先ず考える職員一同の取り組みの姿勢の柱となっています。

そんな折、ある集まりで、丸山真男先生から、大学共同セミナーの同窓会の集まりのお話を伺い、ハウスを支えてくださる「人の心とその力」の積み重ねに、改めて感じ入っております。

（岡）

●予　告●

●第5回大学教員研修セミナー

よりよい大学教育の方法を求めて
——カリキュラム開発をめぐって——

期　日：'93年1月23日～24日（土～日）
定　員：30名
会　費：17,000円（非会員校20,000円）

◆趣　旨

カリキュラムは大学や学部の教育理念を実現していくプログラムであるともいえるが、大学設置基準の改正によって、独自のカリキュラムを編成し、教育にあたらなければならなくなった。そこで、改めてカリキュラムとは何か、どうやって開発していけばよいのかを考える必要がでてきた。カリキュラム開発の主導的立場にある教員を主な対象として、カリキュラムの開発に際して最も重要な点は何かを、その理論的・制度的側面と共に、最近の代表的な事例の研究を通して考えることである。

◆講　演

カリキュラム開発のパラダイム
一般教育学会会長・香川大学名誉教授　**堀地　武氏**

◆パネル・ディスカッション

1．慶応義塾大学湘南校舎（SFC）の事例
　慶応義塾大学総合政策学部教授　**曽根泰教氏**
2．京都大学総合人間学部の事例
　京都大学総合人間部教授　**山本利治氏**
3．電気通信大学電気通信学部の事例
　電気通信大学電気通信学部助教授　**柴田　喬氏**
4．大妻女子大学社会情報学部の事例
　大妻女子大学社会情報学部長　**磯田　浩氏**

〈運営〉FDプログラム小委員会

◆問い合わせ・☎0426-76-8532（直通）・8511（代表）

セミナー・ハウス　1992年10月25日発行（毎年4回）
1992年秋号（第128号）
発行＝財団法人　大学セミナー・ハウス
〒192-03　東京都八王子市下柚木1987
TEL0426-76-8511　FAX0426-76-1220
振替口座　東京5-74590
発行人＝岡　宏子
編集＝大学セミナー・ハウス企画室
制作＝中央公論事業出版
SEMINAR HOUSE
The Quarterly Journal of Inter-University Seminar House
Autumn 1992 No. 128